

終章

嵐の海に浮かぶ小舟のように、今、大学は荒波に大きく揺らいで、従来のイメージは大きく変貌してきている。経営面では、18歳人口の減少にともない、必然的に受験生が減少し続けており、危機的状況に直面する大学もある。2007年は、18歳人口の減少で志願者数と入学者数がほぼ一致する大学全入時代のはじまりといわれていたことは記憶に新しい。実際には若干ズレが生じたようであるが、定員割れを起こした私立の短期大学は、過半数に及ぶというデータもある。短期大学をめぐる状況は年ごとに厳しさを増し、定員割れの短期大学も今後増えることはあっても減少することは望みにくい。受験生や社会の要請をいち早く把握し、その要求にこたえなければ、このような状況に飲み込まれていくのみである。

大学運営の面では、利害関係者としての学生への責任や社会にはたす役割などが厳しく問われている。本学の歴史は、大谷大学文学部にははるかに及ばないが、それでも半世紀を超えており、その時々を受験生を含む社会の要請にこたえてきたつもりである。文化学科を廃止し、仏教科の門戸を広く社会人にも開こうとしているのもそのような応答の一端である。しかしどのような対応をとろうとも、根底には、建学の理念が揺るぎなく存在している。このことも含め、自己点検・評価の作業をおして明らかになった大学運営上の個々の課題は各章に述べてきたところであるが、ここでは全体的な課題を二点述べておきたい。

ひとつは、本学に働く教職員のすべてが、大学運営にかかわっており、課題があれば改善するという意識を共有することである。そのような意識が共有されてはじめて、点検・評価の結果から取り組むべき課題を認識し、改善するという一連の流れが、もっとも効果的、かつスムーズにおこないうるものであろう。「大谷大学自己点検・評価規程」が制定され、全学的で組織的な点検・評価活動がおこなわれているとはいえ、活動への意識のありようは、大学に働く全員を対象としたとき、少なからぬ振幅があるといわざるをえない。

もうひとつは、建学の理念をいかに具体化していくかの明確な見通しをもつことである。冒頭の小舟の譬喩でいうなら、本学の場合、荒波にもまれながらも目的地は理念が示しているものの、具体的にどう舵をとればめざすところにたどりつけるか、が明確ではない。目前の課題の解決やある程度先のイメージがあるだけでは十分とはいえない。そうしたイメージを実現するための中長期的な方策を確定する必要があるのである。一歩先が見えにくい時代であることを思えば、それは容易なことではないかもしれないが、逆にこのような方策を基礎としてこそ、点検・評価活動は大学の航路を検証することができる。

もとより、第三者評価のために自己点検・評価があるわけではない。大学が不断に自己点検・評価活動をおこなうべきことはいうまでもないとはいえ、第三者評価が総合的な点検・評価活動の大きな契機となったことは偽らざるところである。その結果、改善に取り組みねばならないさまざまなことが問題点として明らかになったばかりでなく、問題点相互の関連性も明らかになってきたのは、自己点検・評価活動の成果であった。

従来もそうであったように、今後とも、建学の理念を堅持し、その具体化をめざして努力する覚悟である。